

寺山修司「さらばハイセイコー」論

—— 群衆と賭博と詩 ——

児玉喜恵子

はじめに

昭和の怪物と呼ばれたハイセイコーという馬がいた。昭和四八年三月の弥生賞で中央競馬にデビューし、昭和四九年一二月の有馬記念を最後に引退した。数多くの競馬に関する著述を発表していた寺山修司は、ハイセイコー引退にあたって製作されたLPレコード「さらばハイセイコー」⁽²⁾に、詩「ふりむくと……」を朗読発表した。のち、「ふりむくと……」は「さらばハイセイコー」と改題され、寺山の競馬随筆集『競馬への望郷』⁽³⁾の巻頭に収められた。⁽⁴⁾

寺山の競馬関連の活動について論じられることはほとんどないが、齋藤慎爾がハルキ文庫版『勇者の故郷』⁽⁵⁾解説に「八頭のサラブレッドが出走するならば、そこには少なくとも八篇の叙事詩が内包されている」という言葉に端的に示されているように、寺山は競馬批評を文学・思想の境位にまで高めたと思う。

と述べているように、そこには看過できないものが多い。寺山は、「集団的な文学の可能性」、「集団による詩」を探求し続けた作家である。「さらばハイセイコー」に描かれる群衆の希望への希求は、その詩的実践の一つであると考えられる。「さらばハイセイコー」は、『寺山修司詩集』⁽⁶⁾、『寺山修司全詩歌句』⁽⁷⁾など寺山の文学作品の全体を集めて編まれた書に収録されてはいない。『寺山修司全詩歌句』編注には「著者が生前に作成した企画書に基づいて集成されたもの」とある。その意図は明らかでないが、本論では、この詩の構造における群衆と賭博の機能の解明を通じて、寺山の文学の中に重要な位置を占め得る作品であることを明確にしたい。

一 「ふりむく」群衆・「ふりむくと」見える群衆

この詩の導入として全体を暗示する題名の「さらば」という言葉によって、われわれはこの詩が別辞であることを

予感し、別離を告げる相手が「ハイセイコー」であると知る。

「ハイセイコー」とは何か。「昭和の怪物」と綽名された人気の競走馬であったハイセイコーは、地方競馬（大井競馬）にデビューするや六戦六勝し中央競馬に登場したというドラマを持つ。時にライバル馬たちに敗れながらも、概ね好成績をあげ、昭和四八年五月の日本ダービーでの単勝支持率六六・六パーセントという数字は、ハイセイコーの爆発的人気をそのまま表している。増沢末夫騎手の歌った「さらばハイセイコー」の大ヒットから察せられるように、馬券を手にする人々のみでなく、当時の誰もがハイセイコーという馬を知っていた。

詩には十六人のドラマがオムニバス形式で描かれ、彼等が共有するのは、ハイセイコーの思い出である。全二一聯の構成で、前後半八人ずつのドラマが描かれている。レコード付属冊子掲載は全二〇聯であったが、『競馬への望郷』では最終聯が二つに分けられ全二一聯となっている。

この詩が、当初「ふりむくと……」と題されていたことはすでに述べたが、詩の中には一七回「ふりむくと」という言葉が繰り返される。

ふりむくと

一人の少年工が立っている

彼はハイセイコーが勝つたび

うれしくて

カレーライスを三杯も食べた

ふりむくと

一人の失業者が立っている

彼はハイセイコーの馬券の配当で

病気の妻に

手鏡を買ってやった

ふりむくと

一人の車椅子の少女がいる

彼女はテレビのハイセイコーを見て

走ることの美しさを知った

ふりむくと

一人の酒場の女が立っている

彼女は五月二十七日のダービーの夜に

男に捨てられた

ふりむくと

一人の親不孝な運転手が立っている

彼はハイセイコーの配当で

おふくろをハワイへ

連れていつてやると言いながら

とうとう約束を果たすことができなかった

ふりむくと

一人の人妻が立っている

彼女は夫に隠れてハイセイコーの馬券を買ったことが
たった一度の不貞なのだった

ふりむくと

一人のピアニストが立っている

彼はハイセイコーの生まれた三月六日に
自動車事故にあつて失明した

ふりむくと

一人の出前持ちが立っている

彼は生まれて初めてもらつた月給で

ハイセイコーの写真を撮るために

カメラを買った

ふりむくと

大都会の師走の風の中に

まだ一度も新聞に名前の出たことのない

百万人のファンが立っている

人生の大レースに

自分の出番を待っている彼らの

一番うしろから

せめて手を振って

別れのあいさつを送ってやろう

ハイセイコーよ

お前のいなくなった広い師走の競馬場に

希望だけが取り残されて

風に吹かれているのだ

この前半部では、八人の人間にとってのハイセイコーにまつわるドラマが語られる。「ふりむくと／一人の……た」で統一された八つのドラマは、過去形の結びとともに八人各々の思い出、回想、である。そして、さきの引用部分最後の第九聯には「百万人のファンが立っている」とあり、一人一人の大写しがここで群衆の遠写へと切り替わる。八人が「百万人のファン」のうちの一人一人であることは、前の八聯同様「ふりむくと」眼に映るものとして「百万人のファン」が書かれていることからわかる。八人各々が第九聯に至って群衆のうちの個であることが提示されるこの

前半部分は、個のドラマと個々の「師走の競馬場」への視線とが、群衆のドラマと群衆の視線の大きな束となり、広い競馬場に満ちてゆくという一つのヤマを形象化している。個と群衆、という構図のみでなく「ふりむくと」という動きには、ふりむいた先に見える個々のドラマを背負った「百万人のファン」という密度の高い群衆と、ふりむく以前に見えている「お前のいなくなった広い師走の競馬場」の無との構図がある。「ふりむくと」という言葉の繰り返しのよって、聯を重ねるごとにその構図は輪郭線を強めてゆく。

記録的Ⅱドキュメンタリー的手法で描かれる前半部において「百万人のファン」は、「まだ一度も新聞に名前が出たことのない」言わばエキストラⅡ背景としての群衆である。だが、その中の一人にピントを合わせればそこにはドラマが存在する。「ふりむくと／一人の」の繰り返しのよって描かれていく「ハイセイコー」に絡む思い出を持つ個々は群衆として、ある連帯を持つように印象付けられる。たとえば、同郷人であるというだけで初対面の人物と楽しく酒を飲み交わしたりする時のような「思い出」を核とする連帯がここにはある。そして、同じ故郷の山にも、各々異なる思い出があるように、百万人の各々にドラマがあることを第一聯から第八聯で描き出す。

ハイセイコーの勝利のたびに「カレーライスを三杯も食べ」る「少年工」や、ハイセイコーの姿に「走ることの美しさを知った」という「車椅子の少女」、ハイセイコーを写すために初月給で「カメラを買」う「出前持ち」。馬券を買うことはなかったかも知れない三人の若者達にとって、ハイセイコーは英雄的存在として在る。ハイセイコーの馬券購入に絡むドラマには、その配当で病妻に「手鏡を買」った「失業者」、配当で母親をハワイに連れてゆくと言いつつながら果たせなかった「親不孝な運転手」、「たつた一度の不貞」として馬券を買った「人妻」が登場する。病妻を抱えた職のない男と親孝行することの出来なかった男は、それぞれに楽でない生活の中に馬券を買い、ハイセイコーの勝利に夢を見る。夢を見るという点では「人妻」も同様である。「不貞」と思いながら「夫に隠れて」馬券を買った

女は、日々に何か不足を感じているのかも知れない。また、ハイセイコーに絡む思い出は、好事ばかりではない。「五月二十七日のダービーの夜に／男に捨てられ」てしまった「酒場の女」、ハイセイコーの生まれた日に失明した「ピアニスト」、彼等にとってハイセイコーは不幸の標識であるが、それだけではない。「酒場の女」が男に捨てられた「五月二十七日のダービー」は、昭和四八年の日本ダービーのことで、大本命ハイセイコーはタケホープに敗れ三着であった。恋に破れた「酒場の女」が、その日初めて敗れた不敗のハイセイコーに寄せるエンパシーは、人生の無情さと辛さであつたろうし、「ピアニスト」は光を失った日に生まれたハイセイコーに、自身の見るはずであつたものを託しているだろう。

彼等八人は、第九聯において「まだ一度も新聞に名前が出たことのない」「人生の大レースに／自分の出番を待っている」者達として束ねられる。彼等を束ねるのは、不遇であるという現況と、不遇の日々の中でハイセイコーに何かを託しているということである。不遇の人々にハイセイコーが何かを託されるのは、地方競馬から中央競馬にデビューし活躍するという競馬界では稀有の経歴を持つ馬だからであり、「まだ一度も新聞に名前が出たことのない」彼等の不遇の今は地方競馬に、待ち望む「自分の出番」は中央競馬での活躍に投影される。だが、この詩は別辞であり、夢を預けられるハイセイコーはもう既に去ってしまった。夢を託すものを失い、彼等はどうすればよいのだろう。第九聯には「お前のいなくなった広い師走の競馬場に／希望だけが取り残されて／風に吹かれているのだ」とあり、彼等の「希望」は今「風に吹かれている」。他に託された「希望」を描くには、「希望」を抱くことに切実さを持つ不遇の者達を我々の前に引き出して見せることが必要であつた。

二 群衆と個と

様々の人々を連ねて描写してゆく方法は、寺山がよく用いる常套手段のひとつで、たとえば「人生は夢ではない」と題されたハイセイコーの第四十回日本ダービーの敗北についてのエッセイでは、ある童話研究家の見方、ある名探偵の見方、ある怪奇作家の見方、ある人情家の見方、ある科学小説家の見方、ある競馬無頼の見方、ある予想屋の見方、と続けてゆく方法で書かれており、また、人はなぜ競馬に熱中するかについて書いた「二時代一レースの思想」では、「たとえば、ある少年の意見。……たとえばあるサラリーマンの意見。……」という具合に書かれている。だが、それらの文章とこの詩との決定的な差異は、そうした個が束ねられ群衆として描かれることにある。

寺山は、詩論「集団による詩」⁽¹⁰⁾に

一台のスポーツカーを組み立てるように、エンジンの轟音と油の匂いのなかで、集団で「一篇の詩」を組立てるという発想は、まだまだ批評家や詩人を説得する力を持たないことだろう。集団の論理に対立して、内部との対話を守ってゆくのが詩思想であると思ひこんでいる書齋の獵人たちにとっては「内部との対話」と「外部との対話」は、つねに立体交差する二つの異なった次元での対話であつて、それらを魂の中の同時性としてとらえようとするのは、あまりにも無謀な企みだということになるだろう。(中略) ジャズのように、詩は他人とのインプロビゼーション(即興演奏)の中からは、生まれないか? 数は、メスカリンやLSDのように詩人の個を、ゆさぶることはできないか? 詩人にとって、群とは何の喩なのか? 集団による詩ということは、ことばを変えて言え、集団による幻想ということになるだろう。それは魂の乱交パーティーとでも言つた印象で私をとらえる。(中略) そこには個人の想像力と集団の力学との葛藤が生まれることによって、「閉じられた詩」とはべつのものが

生まれ出る可能性を思わせるのである。

と書いている。個を連れ、群衆に集中させてゆく方法はここにある「魂の中の同時性」を目指した実践であるといえる。個と群衆とを一つの詩に描くことで、詩を開こうとする試みである。

一般に、個と群衆は相容れないものとしてある。群衆の一部になってしまうと、個は個であることを停止しなければならぬと考えられているからである。また、個は個を回復しようとするれば、群衆のなかで孤独となる。

たとえば、渋谷龍彦は「群衆のなかの孤独」⁽¹¹⁾に次のように書く。

わたしが人生の悲哀をはじめて知ったのは、競馬場においてであった。(中略) 七つか八つの頃、わたしは、父につれられて中山競馬場に行った。(中略) ところが、いつまで待っても、父が戻ってこないのである。(中略) わたしの周囲は沸きたち、どよめいた。歓声や罵声がとんだ。大人たちに取りまかれて、しょんぼりと涙ぐみ、木のベンチにすわっている少年に気がつく者は、ひとりもいなかった。群衆のなかの孤独を、わたしは小さな胸で噛みしめていた。(中略) それ以来、わたしは競馬場に一度も足を踏み入れたことがない。

これまで多く個は群衆のうちに孤独であると描かれてきた。坂口安吾は「群衆の人」⁽¹²⁾に

孤独には雑沓の街が好ましい。其処では各の人々がお互にアンディフェランでノンシャランで、各の中に静かな泉を溢らせ乍ら、絶えざる細い噴水を各の道に流し流し行き交うてゐる。

と書き、椎名麟三は「群衆のなかの顔」⁽¹³⁾に

私が、天王寺公園を避けてここへ来る気になったのも、ぶつからずには歩けないほどの群衆のなかにいたかったからだ。たしかに名のない群衆の混沌とした渦ほど、私には手のとどかない思いをさせるものはない。それらは私などの問題にならないほどの強大な力をもっていて私を脅かして来るし、しかも私が生きていようがいまい

が、一向頓着のない完全な独立性をもって私に対している。と書いた。個は群衆のうちでどのようなように個としてあるのか。

萩原朔太郎の『定本青猫』中「群集の中を求めて歩く」⁽¹⁴⁾には、

おほきな群集の中にもまれてゆくのは楽しいことだ。

みよ この群集のながれてゆくありさまを

浪は浪の上にかさなり

浪はかざりなき日影をつくり、日影はゆるぎつつ

ひろがりすすむ。

人のひとりひとりにもつ憂ひと悲しみと、みなその

日影に消えてあとかたもない。

ああ このおほいなる愛と無心のたのしき日影

たのしき浪のあなたにつれられて行く心もちは涙ぐましい。

との一節がある。群衆の「浪」は、椎名麟三が「私などの問題にならないほどの強大な力」と表現したように個を包み込んで「ながれて」ゆくが、そこに在ることは「楽しいこと」でもある。この詩に朔太郎は「私のかない憂鬱をつつんでゐる／ひとつのおほきな／地上の日影」とも書いているが、孤独を感じながらもそこに在ることが同時に孤独を癒しものである。さらに朔太郎は散文詩「群集の中に居て」⁽¹⁵⁾に次のように書く。

げに都會の生活の自由さは、群集の中に居る自由さである。群集は一人一人の単位であつて、しかも全體としての綜合した意志をもつてゐる。だれも私の生活に交渉せず、私の自由を束縛しない。しかも全體の動く意志の中

で、私がまた物を考へ、爲し、味ひ、人人と共に楽しんで居る。心のいたく疲れた人、思い悩みに苦しむ人、わけても孤獨を寂しむ人、孤獨を愛する人によつて、群集こそは心の家郷、愛と慰安の住家である。

寺山は「詩人にとって、群とは何の喩なのか？」と書いたが、朔太郎はそれを「心の家郷、愛と慰安の住家」とした。それは、「群集の中を求めて歩く」にある「人のひとりひとりにもつ憂ひと悲しみ」と個の孤独との融合によりもたらされる「慰安」ではないだろうか。孤独の集合体としての群衆がここに捉えられている。

また、競馬場の群衆と個を描く鮎川信夫の「競馬場にて」⁽¹⁶⁾という詩がある。鮎川の詩で「いま評判のサラブレッド四才馬を見ようとして／十万にのぼる人々が／せまい競馬場の入口に殺到してくる」という第一聯の群衆は、レースを前にして「スタート前の一瞬の静けさ／固唾をのむ一人の沈黙は、千人の沈黙／十万の期待は、この瞬間に一致する」。そして、群衆の思いが「何百万の人々が、もう一度溜息をつくのだ／競馬のように／われわれの生存競争もすべてフェア・プレー／だったらいいのにと……」と描かれる。詩のラストで群衆は「競馬が終ると／群衆は押しあいへしあい停車場めがけて／ひろい出口から流れだす」のだが、詩は最後に語り手のモノローグである「誰もいなくなったスタンドに立って／自分ひとりにかえるのは／何という惨めなことだろう／この淋しさの波紋／このはてしない空虚は／千万の人々を容れるに足りるものだ」という言葉によつて閉じられる。寺山の編集した詩のアンソロジー『男の詩集』⁽¹⁷⁾中の「もし詩がきらいでスポーツが好きだったら」の章にこの鮎川の詩が採られており、そこには寺山のコメントが付されている。

この詩は観察者の眼で書かれた「競馬」である。だが競馬場の群衆の中にいてさえ醒めつづけている淋しさは、「千万の人々を容れるに足る空虚さ」よりももっと淋しくはないだろうか。

「観察者の眼」を「淋し」という言葉は、「観察者」でなく群衆の眼を志向するものであるといえる。鮎川の詩には

「群衆の中にいてさえ醒めつづけている」孤独があり、寺山の詩には群衆の中に混交してゆく孤独がある。「さらばハイセイコー」第九聯において個の眼が束ねられたものとして群衆の眼がある。語り手は「百万人のファン」の「一番うしろから／せめて手を振って／別れのあいさつを送ってやろう」という。その視線は群衆の視線と一体となっている。この詩で「ふりむ」いているのは、一人の語り手だけではない。「少年工」も「車椅子の少女」も「人妻」も「ふりむけば」同じ群衆の一人一人のドラマが見えるのである。百万人の中の誰もがこの詩の語り手として詩を語ることができるのである。ポオの「群衆の人」⁽¹⁸⁾は、群衆の中の一人のドラマを追う男の話であるが、コーヒー店のなかから通りの群衆を観察する男の語りに次のような一節がある。

一種荒涼たる光の効果に、私はあたかも魅せられたものようになって、道行く人々の顔をしばしばとながめていた。もとより窓の外の世界は、まるで飛ぶように流れてゆく、したがって一人の顔を眺め見る時間といつては、ほんの瞬間的な一瞥にしかすぎないのだが、しかしそれにもかかわらず、なおあの時私があつた一種特異な精神状態は、しばしばその短い一瞬、一瞥の中にさえ、長い長いその人の過去を読みとることができるように思われた。

ここにある「その人の過去を読みとることができるような」「一種特異な精神状態」は、この詩のなかで群衆全体に共有のものである。それは、ハイセイコーという紐帯によって繋がれた個々のドラマを持つ群衆を描くことで実現されている。

寺山は「個人の想像力と集団の力学との葛藤」から生み出される「集団による詩」を志向したが、ボードレールは小散文詩『パリの憂鬱』⁽¹⁹⁾中の「群衆」において、「群衆、孤独。活動的で多産な詩人にとって、たがいに等しく、置き換えることの可能な語」と書いている。また、ここにボードレールは「詩人は、思いのままに自分自身でもあり他

者であることができるという、この比類のない特権を享けている。(中略) 詩人は、欲する時に、どんな人物の中へでも入ってゆく」とも書いたが、この詩でそれは詩人の特権として描かれてはいない。それは、描かれた一六人、語り手、我々読者のすべてに許されている。群衆と個の文学の系譜の中で「さらばハイセイコー」を考えるならば、「ふりむく」動きに支持されて、連帯を持つ群衆が同時に個であり得る構造を持つこの詩は、ボードレール、ポオが描いた群衆と個に連なりつつ、新たに『閉じられた詩』とはべつのものを描く作品として位置付け得るのではないか。

三 賭博・競馬

詩の後半部の考察に入る前に、この詩における競馬について述べたい。競馬はいうまでもなく賭博である。賭博の特徴にまず偶然性がある。かつて後鳥羽上皇が意のままにならぬものとして「僧兵、鴨川の流れ、賽の目」をあげたように、偶然性は同時に平等性でもある。ロジェ・カイヨワは『遊びと人間』⁽²⁰⁾の中の「遊びの分類」においてラテン語でサイコロ遊びを意味する「アレア」について次のように定義している。

遊ぶ人の力が全く及ばない決定を基礎とし、従って、相手に勝つことより、運に勝つことの方がずっと問題であるようなすべての遊びを示すために、私は、この名称を借用する。(中略) 偶然の遊びは、優れて人間的な遊びであると思われる。

この詩における「ハイセイコーの馬券」が「相手に勝つことより、運に勝つことの方がずっと問題であるような」ものでもあることは、さきの八人のドラマにあきらかである。「少年工」が「うれしくて／カレーライスを三杯も食べた」のは何も馬券で儲けたからではないだろうし、「人妻」にとって「夫に隠れて／ハイセイコーの馬券を買ったことが／たつた一度の不貞なのだった」のは、へそくりを貯め込むためではあるまい。百万人のファンは、金銭ばかり

でない何かにも賭けているのである。それは、カイヨワのいうところの「運」という言葉に集約できよう。

こうした「運に勝つ」こと（或いは負けること）は、賭博の偶然性・平等性そのものである。「運」とはもとよりそうした性格のものであるはずだからである。この詩において、平等性をより希求しているであろう不遇の者達のドラマが綴られるのは、賭博としての競馬を核とした群衆だからである。鮎川はさきに引いた詩に「競馬のように／われわれの生存競争もすべてフェア・プレー／だったらいいのに」と書いたが、少年工、失業者、車椅子の少女、酒場の女、運転手、人妻、失明したピアニスト、出前持ち、「まだ一度も新聞に名前が出たことのない」百万人の人々は、ハイセイコーに己れの「運」を賭けながら「人生の大レースに／自分の出番を待っている」人々なのである。そして、ハイセイコーが去った今、競馬場の群衆の前には、「運」に勝つという「希望だけが取り残されて／風に吹かれているのだ」。この詩における賭博としての競馬、そして競馬において賭けの対象である競走馬が必然であるのは、人生の偶然性・平等性に賭ける人々のドラマを描き出すためである。

また、群衆を描くのに必要である広場が競馬にはある。八人の中に成人男子ばかりでなく、女、子供が登場するのには、彼らを受け入れる競馬場という場が必要である。そして、馬券を買うだけが競馬の楽しみではないということ、つまり賭博の持つ性質としての「運に勝つ」欲求が必要なのである。競馬と詩、賭博と詩はこうして固い結びつきを持っている。

こうした場には祝祭性も伴ってくるであろう。日常性からの解放もここにはある。この祝祭性については稿を改めて論じたいと思うので、ここでは賭博のもう一つの特徴である社会的負性に論をすすめる。

兼好法師は「徒然草」に「囲碁双六好みて明し暮す人は、四重五逆にも優れる悪事」と書いたが、賭博に対して批判的な社会の意識には根強いものがある。賭博の持つ射幸心を煽る性質が、労働とは相対するものであるからなのだ

が、この詩にあるように、賭博が人間のドラマを描くのになきわめてすぐれた題材であることもまた確かである。海外、国内問わず、ドストエフスキー「賭博者」しかり織田作之助「競馬」しかり、多くの作家が賭博を題材に人間を描いてきた。「さらばハイセイコー」は、賭博を必然とするそうした作品の一つであると言える。そして、そのような中でも、群衆が描かれる対象であることにこの詩の存在意義があることはさきに述べた通りである。賭博の社会的負性は、そのままに人間の心理的葛藤に付加され、個と環境との葛藤までも描き出すことができる。「人妻」によって馬券購入が「不貞」となるのは、「夫に隠れて」いるからだけでなく、この社会的負性が背景にあると考えられる。「隠れて」買った物が馬券であることが「人妻」のドラマに拡がりを与える。

さらに、賭博の持つ平等性は群衆の特性の一つでもある。エリアス・カネッティは、『群衆と権力⁽²¹⁾』の中で「群衆の諸特質」を四つに分類し次のように述べている。

群衆の内部には平等が存在する。(中略) それは基本的な重要性をもち、群衆とは絶対的平等の状態である、と定義しても差支えないほどである。(中略) 正義に対するあらゆる要求、あらゆる平等理論は、結局、群衆の一員だったことのある者なら、誰にとつても親しみのある、現実の平等体験から、そのエネルギーをひきだしているのである。

群衆はもとより平等性を持つが、詩に賭博が描かれることでよりその平等性は強化される。

この詩において賭博と群衆は、その偶然性、平等性によって機能している。

四 「ふりむくな」

さて、詩の後半部には「ふりむくな」という言葉が出てくる。この「ふりむくな」を中心に、第九聯の群衆の視線

の先にあつた「師走の競馬場」で「風に吹かれて」いた「希望」についての考察を述べる。

ふりむくと

一人の馬手が立っている

彼は馬小屋のワラを片づけながら

昔 世話したハイセイコーのことを

思い出している

ふりむくと

一人の非行少年が立っている

彼は少年院の檻の中で

ハイセイコーの強かった日のことを

みんなに話してやっている

ふりむくと

一人の四回戦ボーイが立っている

彼は一番強い馬は

ハイセイコーだと信じ

サンドバッグにその写真を貼って

たたきつづけた

ふりむくと一人のミス・トルコが立っている

彼女はハイセイコーの馬券の配当で

新しいハンドバッグを買って

ハイセイコーとネームを入れた

ふりむくと

一人の老人が立っている

彼はハイセイコーの馬券を買ってはすれ

やけ酒を飲んで

終電車の中で眠ってしまった

ふりむくと

一人の受験生が立っている

彼はハイセイコーから

挫折のない人生はないと

教えられた

ふりむくと

一人の騎手が立っている

かつてハイセイコーとともにレースに出走し

敗れて暗い日曜日の夜を

家族と口もきかずに過ごした

ふりむくと

一人の新聞売り子が立っている

彼の机の引き出しには

ハイセイコーのはずれ馬券が

今も入っている

もう誰も振り向く者はないだろう

うしろには暗い馬小屋があるだけで

そこにはハイセイコーは

もういないのだから

ふりむくな

ふりむくな

うしろには夢がない

ハイセイコーがいなくなっても

すべてのレースが終わるわけじゃない

人生という名の競馬場には

次のレースをまちかまえている百万頭の

名もないハイセイコーの群れが

朝焼けの中で

追い切りをしている地響きが聞こえてくる

思い切ることになろう

ハイセイコーは

ただ数枚の馬券にすぎなかった

ハイセイコーは

ただひとレースの思い出にすぎなかった

ハイセイコーは

ただ三年間の連続ドラマにすぎなかった

ハイセイコーはむなしかったある日々の

代償にすぎなかったのだと

だが忘れようとしても

眼を閉じると

あの日のレースが見えてくる

耳をふさぐと

あの日の喝采の音が

聞こえてくるのだ

前半部同様、八人のドラマが語られ、続いて最後のクライマックスの四つの聯が置かれる。ここで、さきの前半部においては八人すべてが「ふりむくと……た」という過去形で語られていたのに対して、後半部ははじめの二つの聯が「ふりむくと……る」と現在形であるのは、ただ単調さを嫌ったわけではないだろう。クライマックスの「ふりむくな／ふりむくな」に繋がる重要な伏線として機能しているのである。前半部の八人のドラマが思い出であることは先に述べたとおりであるが、この後半部のはじめの二つの聯では、「思い出している」「みんなに話してやっている」とあることでわかるように、今思い出にふける人物が描かれているのである。一人は今「馬小屋」におり、もうひとり「少年院の檻の中」にいる。つまり物理的存在として群衆のうちに立っているわけではない。だが、「ふりむいた視線の先に彼らはいる。群衆がここに集まった人々だけで構成されているわけではないということである。前半部の「車椅子の少女」なども同様かも知れない。

群衆はここにおいてさらに拡大する。寺山は「競馬場で逢おう」⁽²²⁾に「この章は私だけのものではない。馬券を遺書がわりにして自殺した旅役者、馬の名前を刺青したヤクザ、万引常習犯の母恋ボクサー、登場してくる誰彼のすべてが「共著者」であるともいえる」と書いた。この詩においても、語り手でもある群衆は、詩の外側にいると思っている。我々読者をも包み込む力を持つ。我々が、語り手の一人となることができるのである。

前半部の「少年工」等と同様に、ここでの「非行少年」、「四回戦ボーイ」にとってハイセイコーは英雄的存在であ

り、「ミス・トルコ」が配当で買ったバッグにハイセイコーの名を入れたのは、夢は叶うということの象徴としてのハイセイコーが彼女の中にあるからだろう。逆に「老人」、「受験生」、「騎手」、「新聞売り子」にとって、ハイセイコーは「挫折」の徴であり、「運」と「平等性」の人生を示すものである。後半部に「挫折」の象徴としてのハイセイコーが描かれるのは、今や既に夢を託されていたハイセイコーは去り、群衆の「希望」は風に吹かれていて、他に夢を託すことを「思い切る」ことを迫られているからに他ならない。

「ふりむくな／ふりむくな」という言葉は、群衆のうちの一人である語り手が自身に向けて、また群衆の他の人々に向けて発している言葉である。この言葉は「共著者」たり得る我々にも向けられるであろうし、我々が自身に向かって発することもあるだろう。

そして、「ふりむく」ことを続けてきた群衆にとって、題名にある別れがここで決定的になる。「ふりむくな／ふりむくな」という言葉に続けて「うしろには夢がない」と書かれる。「夢」は「うしろ」ではなく群衆の前にある。「希望」だけが「風に吹かれて」いるコースが群衆の前にはある。今度は「夢」・「希望」を賭けて、群衆の各々がコースを走ろうという呼びかけである。

群衆は、「人生の大レースに／自分の出番を待っている」人々であり、「次のレースをまちかまえている百万頭の／名もないハイセイコーの群れ」である。そして、彼らは「朝焼けの中で／追い切りをしている」のである。「追い切り」とは競馬用語で、レースの三・四日前に行う強い調教のことである。群衆の「大レース」は目前なのだ。

だが、これまで「ハイセイコー」に己れの人生の運を賭けてきた群衆が自ら走り出すことは、そう容易なことではない。「思い切ることにしよう」の繰返しは、自らと仲間の群衆へ向けられたエールである。後押しという言葉である。

この詩のクライマックスであるこの第二十聯において「思い切ることにしよう」と呼びかけ合う群衆は、「ハイセ

イコー」に別れを告げ走り出すために互いを励まし合う。「ふりむくな」「思い切ることになろう」という言葉は、倒れかかっている戦友へ向けてかけられる言葉の如くである。

ハイセイコーの思い出によつて連帯していた群衆は、新たに「希望」・「夢」によつて連帯したのである。

おわりに

この詩の享受はハイセイコーとそのドラマを知る者だけの専有ではない。ハイセイコーについての体験と知識は、この詩による感動の必須条件ではない。それは、この詩がハイセイコーへのオマージュとして以上に、群衆と個のドラマを描くものであることによる。これまで、この詩が群衆―語り手も読み手をも包含し得る―のドラマを描くものであることを見てきたが、この群衆はハイセイコーが去つても崩壊することはない。最終聯にある「忘れようとしても」忘れ得ない「あの日のレース」「あの日の喝采の音」をそれぞれの内にドラマとして抱えつつ、再び「希望」を核に新たな群衆が形成されている。

個の非力さと、運の非情さとを知る読み手にとって、この詩の感動の在処は描かれた個と群衆のドラマのみでなく、群衆が群衆として地を打ちならしている「地響き」にも確かに存在する。

群衆として在ることに対する希望と信頼が、「さらばハイセイコー」全体を作り上げていることは、群衆を描く文学の中におけるこの詩の特異性を支持する。寺山は「集団による詩」(前出)が「いわば数の増大による靈氣オーラのようなものとのきびしい対決である。そしてまたそれは個人の意志の非力さとの対決だともいうことができる」と述べている。群衆と個とを対話させつつ詩を創作することは「個人の意志の非力さとの対決」に他ならず、寺山が追求し続けた「受け手の集団化、享受の想像力に、どこまで「共同性」がもちこめるか」(「情況論」⁽²³⁾)という命題に対するひ

とつの実践としてこの詩は存在する。

「さらばハイセイコー」という題名の通りに、古き連帯を捨てるため、走り出すために、この詩は我々の前にある。

注

(1) 昭和四五年一〇月から亡くなる直前の昭和五八年四月まで執筆を続けた「報知新聞」紙上での競馬予想コラム（寺山は昭和五八年五月四日没）、雑誌「週刊大衆」、競馬専門月刊誌「優駿」などにおける連載、書き下ろしを中心にまとめた競馬随筆集など。競馬を題材にした作品としては、長篇叙事詩「勇者の故郷」（『街に戦場あり』天声出版、S四三・六）やシナリオ「サラトガ、わが愛」（『寺山修司の戯曲』思潮社、S五八・八）がある。中央競馬会のCMに自作自演で出演していた時期もあり、テレビの競馬中継にも盛んに出演をしている。

(2) 昭和五〇年三月、レコード会社ポリドールより発売。構成を寺山が担当。ハイセイコーの出走した中央競馬全一六レースの実況放送の合間に二聯ずつが朗読される形で収められ、レコード付属の冊子には詩の全体が掲載されている。

(3) 新書館、昭和五一年一〇月。

(4) 当初「ふりむくと……」と題されていたのは、昭和五〇年一月に発売され五〇万枚を越える大ヒットとなった増沢末夫騎手によるこの詩と同名の「さらばハイセイコー」という歌が、同LPに入っていたことによるものと考えられる。また、同題名のためしばしば混同されるが、増沢騎手の歌う「さらばハイセイコー」は、「ありがとう友よ　さらばハイセイコー」というサビを持つ作詞小坂巖、作曲猪俣公章による全く別のものである。

(5) 角川春樹事務所、H一一・四。

(6) 思潮社、S四七・一〇。

(7) 思潮社、S六一・五。

(8) 『競馬無宿』新書館、S四八・一〇。

(9) 『思想への望郷 下』大光社、S四十二・一一。

(10) 『暴力としての言語』思潮社、一九七〇・四。

- (11) 「朝日ジャーナル」一九九六・一・一六日号
- (12) 『坂口安吾全集一』筑摩書房、一九九九・五。
- (13) 『椎名麟三全集九』冬樹社、一九七一、一。
- (14) 『萩原朔太郎全集 第二卷』筑摩書房、S五一・三。
注一四に同じ。
- (15)
- (16) 『荒地詩集一九五三』荒地出版社、一九五三・一。
- (17) 雪華社、S四一・九。
- (18) 『ポオ小説全集二』東京創元社、S四九・六。
- (19) 『ボードレール全集 IV』筑摩書房、一九八七・六。
- (20) 岩波書店、一九七〇・一〇。
- (21) 岩田行一訳『群衆と権力』(上) 法政大学出版局、一九七一・三。
- (22) 『馬敗れて草原あり』新書館、S四六・九。
- (23) 『時代のキーワード』思潮社、一九八四・五。